

俳句現代派選集 6

蘇民祭

浅海明龍



略 歴

- 1915年 兵庫県佐用郡に生る。
 1928年 野田別天楼師（母校々長，倦鳥派）
 指導で句作を始める。
 1933年 三越，大丸百貨店勤務，横山蜃楼に
 師事＜雁来紅＞＜漁火同人＞
 1942年 K K神戸鋳鉄東京出張所勤務
 在京中＜琥珀＞＜多麻＞＜太陽系＞
 ＜芝火＞等の同人
 1948年 世界救世教教師専従
 この前後＜さよ＞＜風像＞＜海流＞
 ＜俳句文学＞編集同人
 1965年 ＜青玄＞同人参加
 現在青玄無鑑査同人，現代俳句協会
 会員



俳句現代派選集 6

句集 蘇民祭

昭和57年6月20日発行

著 者 浅 海 明 龍

~~〒520 滋賀県大津市見世1丁目6番3号~~

発行人 俳句現代派選集企画部

代表 津根元 潮

印 刷 大洋印刷産業株式会社

発行所 青玄三光会出版部

〒130 東京都墨田区両国3-24-7

ヴィラ・ロイヤル601津根元方

電話03-631-6106

頒価1,200円 送料200円

句集

蘇民祭

浅

海

明

龍

序 詞

伊 丹 三樹彦

俳句の名において

不易を

現代派の名において

流行を

志す

仲間たちの

詩華集を

陸続として

世に送る

目次

序

伊丹三樹彦

1

蘇民祭

3

解説

繁延 いぶし

103

あとがき

110

カバー写真・△微笑仏▽伊丹三樹彦

大師和讃 持ち寄るものに 囲炉裏臭

濃厚に 狐に騙された祖父 ここに眠る

おんさんまやざとばん ふるさとの 地にぜんまい

早苗甕の　口開く　土の傀儡ら

麦播に撓むを　遠つ祖が　閱す

古風な縁談　べこべこ橋を　渡って来る

畦に佇ち 十方の蛭 昂らせり

山鳩ぼうぼう 紺屋の糞^糞の底まで 紺

悠長な娶りの日 漬物の石沈む

輪廻まかせなり 菖蒲蓬の 湯に浮けば

還俗曖昧 ちゃぼには 鞠躬如と 仕え

屯田老婆の 齢で崩す スイートコーン

成吉思汗鍋で 屯田裔が火照らす 運

やがて風葬される掌を拍ち 箕編みうた

耕牛反転さすとき 父も見た さくら

なぜ歩くのだろう 登先までげじげじ

生雲丹へろへろ啜る 最果てに運んだ 貌

蛸いぶしの竹筒遺し 阿呆を遺し

夾竹桃を眼に 日雇が溜っている

天に至って 捨てられたんぼ 螺復活

鑄掛屋今日も 棕の根っこの 瘤になる

鑄掛稼業は 稚ない音をさせれば 足る

轡おしているのか 鳩を聴いているのか

老籠師 虻に拘泥して憩う

籠編み一路 背にかくやくと もぐさの列

棕蔭に 蓐で稼いだ世を 遣す

煽るものなければ齒朶の 不足色

どうしてでも住む 中腹の松皮むく

爬虫を呑み もとの眼になる鶏の午後

たれからとなく減る 楮 三極刈り

見慣れた枯山だが 素麺の瀑布乾し

舟大工 くろい運河を 朝から負う

瓜の蔕もどる運河の ふな大工